【特別寄稿】

「誰が正しいかではなく、何が正しいのか」の精神で国政へ

黒崎祐一
（自民党東京都第二十七選挙区支部長・咢堂塾卒塾生）

私は、港区議会議員に初当選した二〇一五年から二〇二三年にかけて、咢堂塾に通い、尾崎先生の想いや考え方、政治家としての在り方を学びました。

「永田町一丁目一番地」という、日本政治の中心地において、党派を超えて各分野で活躍されている皆さまとともに学ぶ機会を得られたことは、私の政治家としての基盤となっています。

「議会政治の父」「憲政の神様」と呼ばれた尾崎先生が、生涯をかけて追求された「民主主義」「立憲主義」に対する考え方、政治家や有権者自身がどのような姿勢で政治に向き合うべきか、考え続けてきました。特に、国際環境が激変し「民主主義国」が少数派になりつつあり、国内においても政治不信が高まる昨今においては、より重要さが増しています。

私自身は、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック開催が決定したタイミングで、スポーツと地域をつなぐ活動をしたいとの想いから、十五年間の会社員生活に終止符を打つことを決断。約一年間の準備期間のうえで、二〇一五年に港区議会議員選挙に初挑戦し、初当選することができました。

以降、咢堂塾に通いながら、二期八年（二〇一五―二〇二三年）港区議会議員を務め、発展を続ける港区港南エリアのまちづくりを担い、自身が掲げる港区のビジョンに向かい、豊かで特長のある「まちづくり」と「人づくり」の実現を果たすべく、港区を「前へ」進めてきました。

一方、コロナ禍において、「行政の縦割り構造」や国政に「地域目線・現場目線が不足」しているとの問題意識を持ちました。こうした問題意識から、区民の声をもっと国政に届けたい、日本を牽引する先進都市のまちづくり経験を活かして日本に貢献したい、という想いを強くするに至り、退路を断って自民党の公募にエントリーし、二〇二三年四月に自民党東京都第二十七選挙区支部長に選出いただきました。

以降、中野区・杉並区で本格的に活動を始めました。中野区は、明大中野中学・高校でのご縁がありますが、中野区・杉並区での政治活動としては、ゼロからのスタートでした。

駅でのご挨拶、ポスター、ミニ集会（黒崎祐一と中野・杉並の未来を語る会）、地域行事・イベントなど、様々な機会を通じて、多くの区民の皆さんにご挨拶させていただきました。より幅広い層の方に知っていただくため、最近はインターネットやSNSでの発信にも注力して取り組むなど、活動の幅を広げています。

「ラガーマン」（選手・コーチ・スクール・協会運営）で得た精神力や体力、組織運営力、「港区議会議員」で培った人づくり・まちづくりの視点、「社会人（総合商社）」十五年間で培ったビジネス視点を活かして、地域の皆さまに信頼していただく政治家となり、国政を目指してまいります。

尾崎先生は「誰が正しいかではなく、何が正しいか」を問い続ける姿勢を生涯貫きました。「学び続けること」が政治家の本分ですので、物事の本質をとらえ、政治家としての感覚の基準点を定めるためにも、今後も民主主義や立憲主義を追求するための方向と姿勢を学び続けていくとともに、政治家としての原点を学んだ咢堂塾での経験やご縁を大切に活動し、自分自身に磨きをかけていく所存です。

さて、日本は、少子高齢化・人口減少・財政難・インフラの老朽化などの課題に直面する「課題先進国」と言われており、行政の縦割り構造は各所でひずみが生じています。若い世代からは、将来への不安や生活への不安など、切実なお声を数多く聞かれます。皆さまのご理解を得たうえで、これからの日本にとって必要な改革を進めてまいります。そして、「これからの時代にふさわしい社会を創り、次の世代に引き継ぐ責任を果たす」想いで、「この国を、前へ。」進めてまいります。

（了）